【小学校　詩　最優秀賞】

祖父の話

那覇市立さつき小学校　六年
奥間　友芽子

そこはとても静かな所だった
川がさらさら流れ　ちょうがまう
静かな所だった

祖父が八才の時　戦争があった
米軍の上陸が確実になって
小禄から二日かけて山原へのひなん
一家全めつをおそれて
家族が二手に別れてのひなんだった
ところが　橋が軍によってはかいされ
それ以上北に進めず
やむなく見知らぬ集落にとどまり
小屋をかりてのそかいとなった
祖父の父は防えい隊員だった
家族の落ち着き場所を見届けると
責任があるといって南部にもどっていった
ほどなく
戦況ははげしくなり
祖父達は集落近くの山にひなんする
ごはんをたくのに　けむりを気にし
水をくみに行くのに　空を気にする
用たしで数センチの所にたまがあたる
死ととなり合わせの日々だった

ある夜おそく
祖父の父が馬でかけつけて来たという
家族の顔が見たくなったから会いに来たという
ねている祖父達の顔を
一人一人いとおしそうになでていたという
そして　任務にもどるという

祖父の母は必死にひきとめたが
またもどって行ったという
それが　祖父の父の
生きた最後の姿だった

今春　祖父がひなんした地を
私は祖父とたずねた
川は整備され
海岸はだいぶうめたてられていたが
六十五年前と同じ静かな農村地帯だった
祖父は言う
もっと父と過ごしたかったと
もっと父との思い出がほしかったと
そして　祖父は言う
祖父の父のことを忘れないでほしいと

私は　八才のときから
六月二十三日に
祖父と平和の礎を毎年訪れている
祖父は父の名前をじっと見つめるだけだ
でも
心の中でたくさんの話をしているのがわかる
七十三才の祖父が子どもになるしゅん間だ
私はそんな祖父のそばで
祖父から受けついだ命に感謝している

礎にきざまれている人達は
歴史の中では名もなき人達だ
でも多くの名もなき人達の
たくさんのぎせいがあって
今の私達がいる

私は忘れない
祖父の父のことを
私は伝えたい
祖父の父のことを
平和であることの大切さを